

がんが教えてくれる希望

樋野さんが病院の一角で始めた「がん哲学外来」。それを発展させた「がん哲学外来・カフェ」は今や全国で知られ、各地で拠点を増やし続けている。人は何を求めて「カフェ」を訪れるのだろうか。日本人の死因第一で、今や2人に1人がかかると言われるがんを通して、見えてくる希望とは…。

樋野 興夫さん

医学博士・
順天堂大学教授

(ひの・おきお) 1954年、島根県生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、医学博士。一般社団法人がん哲学外来理事長。米国アインシュタイン医科大学肝臓研究センター、米田フォックスステイスがんセンター、がん研究実験病理部長を経て現職。日本癌学会理事、日本家族性腫瘍学会名誉理事長、第99回日本病理学会総会会長、がん哲学外来市民学会代表。長年の遺伝性がんの研究中、中皮腫の腫瘍マーカーを発見。肝がん、腎がんでの研究功績が認められ、日本癌学会奨励賞、高松宮妃癌研究基金学術賞などを受賞。2008年、提唱する「がん哲学外来」を開設し、現在は「がん哲学外来&メディカルカフェ」を全国で展開。著書に『がん哲学』(EDITEX)、『ここにみことばの処方箋 世界に広がる「がん哲学」(いのちのことば社)、『がん哲学外来へようこそ』(新潮新書)、『がん哲学外来で処方箋を：カフェと出会った24人(TOMOセレクト)』(日本基督教団出版局)ほか。久留米バイブルフェローシップ教員

「サマリヤの女の実践だね、水をくみに井戸に来てイエスに出会った時の。来るときは苦悩を顔に浮かべているけど、帰りは人のために何かをやるとういう、明るい表情になっている」

順天堂大学医学部で教授を務める樋野興夫さん(62歳)は、「がん哲学外来・カフェ」に訪れた人のように話をそう話す。

「がん哲学外来」とは、診断や治療をする診療科ではない。がん患者の悩みに耳を傾け、心に効く「ことばの処方箋」を出すという樋野さんの始めた働きで、患者ががんになったことを機に、より良い生き方を模索するのをサポートするもの。それを発展させ、より多くの人が参加できるような、病院から街中の場所を移したのが「がん哲学外来・カフェ」だ。スタートから八年、賛同者は次第に増え、開催されるカフェの拠点数は今や全国で九十四箇所に上る。

たとえばその一つ、「お茶の水メディカル・カフェ」(東京・

千代田区)には、患者やその家族、医療関係者など、毎月約七十名が訪れる。数人ずつグループに分かれ、お茶を飲みながら、治療の不安や医師とのコミュニケーション方法、家族や職場の人間関係などさまざまなことについて対話する時をもつ。皆、自分のことばで語り、他の人が話すときには真摯に耳を傾ける。胸の内を話し、悩みを共有できる安堵と喜びが、どの顔にもあふれている。

樋野さんの講話が始まると、会場はたびたび笑い声に包まれる。「人間は最後の五年間が勝負」「本当の希望は、苦しみに遭った人にだけ生まれる」「人生の目的は『品性の完成』など、心の栄養となることはがユーモアを交えて語られ、熱心にノートに取る参加者も多い。閉会時には、一人一人が希望の種を握り締め、日常へと戻っていく。「カフェに来て悩みがすべて解決するわけではない。でも、悩みが解消する、つまりその優

先順位が下がることで、自分の生き方を見つめ直し、与えられた使命を生きる意欲が湧いてくる。病気があっても、「病人」ではなくなるんだね」

病気の人が「にもかかわらず」見せる笑顔は、周囲の人の慰めになると樋野さん。カフェは、その実証の場でもある。引きこもりの子が、心を開いて患者たちの対話に加わったり、末期がんで寝たきりの祖母が人を思いやる姿を見て、孫の非行少年が立ち直ったりする。視力や手足の自由を病で奪われたハンセン病患者が、そのうえがんで患ってもなお希望を語るのを、背筋を伸ばして聞き入る不登校児の姿がある。「人生は、他の誰かへのプレゼント」。カフェでそんなシーンに出会うたび、樋野さんはその確信を強くする。

*

樋野さんが生まれたのは、島根半島の西端、出雲市の鶴峠という小さな港村。村に病院は無く、幼い頃、熱を出しては母に

「お茶の水メディカル・カフェ」会場。人を傷つけないことが大前提。人の話をよく聞く、自分の意見を押しつけないというルールとともに、意見の違いや自分の考えが変わることを楽しむ場





人間関係を円滑にするのはユーモア。それと「暇な風貌」と樋野さん（バックは順天堂大学）

「お茶の水メディカル・カフェ」を主宰する 榎原寛さん（右）と

「がん哲学」誕生から今までを振り返り、「自分でやった実感はない。後ろから押されてるような感じ」と話す樋野さん

「君は、南原繁のような人物になれ。彼は実に愛情豊かな、スケールの大きい人だった」

進学のために通った予備校の教師に、東京帝国大学総長を務めた南原繁の教え子がいた。樋野さんはその人の勧めで南原の著作を読み、強く感銘を受ける。彼に影響を与えた新渡戸稲造や内村鑑三、さらに、新島襄や矢内原忠雄など、明治から昭和にかけて活躍した偉人たちの本も読み進めると、彼らの思想の背景にあるキリスト教に興味をもち、聖書も愛読するようになる。青年期、読書で得た含蓄に富むことばの蓄積は、後にがん哲学外来でのごとばの処方箋となり、多くの人を励ますこととなる。

大学卒業後、国内外のがん研究所勤務を経て、順天堂大学の

負ぶわれ、隣村（鷺浦）に行かねばならなかった。「大人になったら医者になる」。峠のトンネルを越え、診療所へ向かう母の背に揺られながら、樋野さんの幼い心に、その思いは芽生えた。

「君は、南原繁のような人物になれ。彼は実に愛情豊かな、スケールの大きい人だった」

進学のために通った予備校の教師に、東京帝国大学総長を務めた南原繁の教え子がいた。樋野さんはその人の勧めで南原の著作を読み、強く感銘を受ける。彼に影響を与えた新渡戸稲造や内村鑑三、さらに、新島襄や矢内原忠雄など、明治から昭和にかけて活躍した偉人たちの本も読み進めると、彼らの思想の背景にあるキリスト教に興味をもち、聖書も愛読するようになる。青年期、読書で得た含蓄に富むことばの蓄積は、後にがん哲学外来でのごとばの処方箋となり、多くの人を励ますこととなる。

病理医となった樋野さん。ある日、中皮腫の患者から相談を受けた。時間を取って話を聞くうち、病気に付随する患者の悩みが、治療のことだけでなく、人間関係や経済、将来についてなどさまざまな問題に波及していることを知る。また、患者の視線になれない「馬の上から花を見ている」状態の現在の医療が、それに応えられていないことを痛感した。

二〇〇八年、病院の一室で始めた「がん哲学外来」には、多

「病理学」と「人間学（聖書の真理）」の架け橋となり、やがて二つが統合した「がん哲学」の誕生につながった。

二〇〇八年、病院の一室で始めた「がん哲学外来」には、多

同じ頃、環境条件の悪化で「不良」が生まれるなど、「がん細胞で起きることは人間社会でも起きる」という不思議な共通点に目が留まり、人間と病気の背後にある人知を超えた神の摂理を強く感じるようになった。それらさまざまな気づきは、樋野さんの中で並列に存在していた「病理学」と「人間学（聖書の真理）」の架け橋となり、やがて二つが統合した「がん哲学」の誕生につながった。

※病理医＝患者の診療を行う臨床医から組織・細胞などを受け取り、病気の診断をする医師

米国CBAベストセラー No.1

私は教会のメンバーです

I Am a Church Member

私は教会のメンバーです

I Am a Church Member

Copyright © 1998 by Thomas S. Rainey

トム・S・レイナー 著
赤松 樹美子 訳
地引網出版



トム・S・レイナー 著
赤松 樹美子 訳

現在の日本の宣教活動を考える時、教会に加わる人が少ないことと同時に、一度はイエスを信じたものの何らかの不満から教会から離れてしまう人たちが少なくないことも大きな問題である。教会に縛られずに自由に生きていきたいという風潮も手伝って、教会員として加わることに抵抗を感じる人たちも多いのではないだろうか。本書は、「教会のメンバーであるとはどういうことなのか?」という本質的な問いを聖書から解き明かすことにより、その豊かな恵みの発見に導く。それを理解するとき、あなたが変わり、教会が変わる。

並製 四六判変形 98頁 定価 1,000円+税
ISBN 978-4-901634-35-9

ご注文はキリスト教書店が下記まで

地引網出版

東京都日野市旭が丘2-2-1 TEL 042-514-8590

☐ ap@revival.co.jp FAX 042-514-8591

<http://www.jibikiami-book.jp>

くのがん患者が訪れ、キャンセル待ちは八十組にもなった。テレビや新聞にも取り上げられて大きな反響を呼び、より普及できる形の「カフェ」となって街へ飛び出すこととなった。

*

「ちよつとした隙間だったね。医療の埋められない隙間にちよつとよくはまった」

では相談しにくいというクリスチャンも少なくないのだ。悩みをいちばんに持っていきけるはずの教会が、本来の機能を十分に果たせていないと感じている。「教会もヨブ記の四人の友人になる危険をはらんでいる。人は弱つた人を、最初は同情とあわれみで訪れるけど、その後は注意しちゃう。そして最後は怒るんだよ。お祈りや説教はもちろんだ切。でも、話を十分に聞くのも、教会に求められている現代的役割だと思うよ」

がんはノンクリスチャンでも牧師でも、なるときは誰でもなる。そんな病をキーワードにした対話の場を教会が提供すれば、そこでさまざまな人が支え合い、励まし合うことができる。すでに教会でカフェを始めているところでは、ノンクリスチャンの参加も多く、結果的に福音に触れる機会にもなっている。特別な準備は必要ない。空の器となる場所を用意して、自身は来た人に入れてもらえばいい。

カフェの原点は、新渡戸稲造が学校の校長だった時、学生のために開いたカフェなのだという。そんな敬愛する先人たちと、天国でカフェをするのが樋野さんの夢。そして今、故郷の鶴鷺（鶴峠+鷺浦）をはじめ、各地にカフェを増やすビジョンに向かい、同志の現れを熱望している。かつて大志を抱き、日本の未来につながる礎を築いた多くのクリスチャンが現れたように。「教会も宗教革命しないと。今こそ、クリスチャンの出番だよ！」

（伊藤千賀子）

